

コンソ語の形容詞と動詞に関する覚書¹

小脇 光男
(熊本大学)

kowakim@se.kcn-tv.ne.jp

0 はじめに

本稿はコンソ語の形容詞および動詞の記述に向けて、これまでの調査で得られたデータをもとに、その明らかになりつつある点、また未解決の問題点を簡単に報告するものである²。

1 形容詞

1-1 形容詞の形態

名詞を修飾する形容詞は大体において、語頭と語尾に a(語頭の a はしばしば消失、ないしは直前の語の語末母音に吸収される)を持っているという点で共通している。また、語尾-tta によってほぼ規則的に動詞化される(語頭の a は除かれる)。ここでは、この名詞を修飾する際の形容詞形を「本来の形容詞」と呼んでおく。以下に、収集した形容詞とその動詞形を列挙する。(以下、b、d、j、q の表記はそれぞれ内破音の[b]、[d]、[j]、[g]を表わす。長母音は特に明示していない。)

	形容詞	動詞
赤い	atima	<u>timnatta</u> ³
青い、灰色	a'aula ⁴	<u>aulanatta</u>

¹ 本稿は、平成 19～22 年度科学研究費基盤研究(B)(1)「オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築」(代表：乾秀行・山口大学)(課題番号 19401023)による調査・研究成果の一部である。なお、本報告は、小脇光男(2006)「コンソ語文法記述のための基礎データ」『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築 (Cushitic-OmotiC Studies 2006)』、平成 16～19 年度科学研究費基盤研究(B)(1)(課題番号 16401008)(代表：乾秀行・山口大学)による研究成果報告書, pp.61-79 の一部を再考し、訂正、発展させたものである。

² インフォーマントとして 2006 年以来、Gellebo Gando 氏(Karate 地域出身で、アルバ・ミンチ高校教員)に協力していただいている。

³ 動詞の語尾として、-tta でなく -natta となるもの(表中の下線を付した動詞)があり、予想される動詞形(*timatta、*aulatta、*ila'atta など)が現われない。-natta の意味用法も含めて、動詞形を再度確認する必要がある。

緑	a'ila'a	<u>ilaunatta</u>
白い	a'ata	atatta
黒い	apora	(未確認)
黄色い	apuddayyaysa	puddayyatta
小さい、少ない	ashakka	shakkatta
大きい、多くの	akutta	kuttatta
乾いた	akokte, akoke	koketa ⁵
湿った	aqoyya	qoyyatta
長い、高い	adera	deratta
短い、低い	akuma'a	kuma'atta
重い	a'ulsa	ulsatta
軽い	asholla'a	shola'atta
近い	adeha	dehatta
遠い	aseka	sekatta
太った	akappa	kappatta
やせた	aqalla'a	qalla'atta
厚い	akorda	kordatta
薄い	aqalla'a	qalla'atta
狭い	akirra'a	kirr'atta
広い	apalda	paldatta
難しい、硬い、高価な	akokkoka	<u>kokkonnatta</u> ⁶
易しい、安い	anukkulla	nukkullatta
良い	apaqara	<u>paqarnatta</u>
悪い	aneqa	<u>neqnatta</u>
必要な、大事な	aparpacisini	parpaciseta

1-2 形容詞の複数形

名詞を修飾する形容詞は名詞の後に置かれる。名詞の性による形容詞の語形変化は特に認められない。なお、ここでは詳細を省くが、名詞の性については、自然性が女性であるもの、および語尾が-(e)taのものが概ね女性であることを除けば、性の判別基準は明らかになっていない。

(1) nama adera

「背の高い男」

⁴ /ʌ/はしばしば消失し、代償延長される。

⁵ 形容詞の語末母音が e、また動詞の語尾が-eta である点で他と異なる。最後の parpaciseta 「必要だ」も同様に動詞の語尾が-eta である。

⁶ この動詞形は、形容詞 akokkoka の語末-ka が消えている(-natta の n に同化?)。述語の形、afa Xonso ikokkoki. 「コンソ語は難しい」では消えていない。

- (2) inanta adera 「背の高い娘(f.)」
 (3) xampirteta apaqara 「きれいな鳥(f.)」
 (4) pona akoke 「寒い冬」

複数形名詞を修飾する形容詞は、語中の最初の CV を繰り返した重複形を取る。

(5a) penna atima (sg.) 「赤いペン」

(5b) pennada atitima (pl.)

(6a) inna ashakka (sg.) 「小さい子ども」

(6b) hella ashashakka (pl.)

(7a) xampiriteta apaxara (sg.) 「きれいな鳥」

(7b) xampira apapaxara (pl.)

(8a) kuta apora (sg.) 「黒い犬」

(8b) kutta apopora (pl.)

(9a) tika akutta (sg.) 「大きな家」

(9b) tikka akukutta (pl.)

(10a) harka akumma'a (sg.) 「短い腕」

(10b) harka akukuma'a (harka の pl. は語末の a が長音)

1-3 形容詞の性

本来の形容詞は、単数形名詞を修飾する場合、その性に関係なく用いられる。しかし一方で、男、女いずれかの性にしか用いられない別形も認められる。形容詞「大きい」を例として次表にその分布をまとめる。

		(i) akutta	(ii) kuttaya	(iii) kuttayteta
大きなサル(m.)	keltayta	○	○	×
大きな雄ヤギ(m.)	qolpa	○	○	×
大きな蚊(f.)	pinneta	○	×	○
大きな雌ヤギ(f.)	talteta	○	×	○

すなわち、(i)の形は男女両性に用いられるが、(ii)語尾-ya の付く形は男性のみ

に、(iii)語尾-*yteta*⁷の付く形は女性のみ用いられる。男性名詞における(i)と(ii)、女性名詞における(i)と(iii)の使い分けについては明らかではない⁸。

この他、インフォーマントが形容詞として挙げたものの中には、本来の形容詞とは異なる形がいくつか認められ、確認の必要があるが、これらは主に動詞からの派生形であろう⁹。

1-4 述語となる形容詞

形容詞が述語になる場合は人称変化を行う。この点、セム語の *stative* に類似しているが、形容詞の人称変化は動詞のそれとはやや異なっている。以下、形容詞(i-a)、(i-b)の人称変化と動詞(ii)のそれとを比較されたい。(語幹と人称接辞の間をハイフンで区切っておく¹⁰。動詞は非過去の人称変化である。)

	(i-a) <i>adera</i> 背が高い	(i-b) <i>akappa</i> 太っている	(ii) <i>doxeta</i> 空腹である
sg. 1	<i>in-der-i</i>	<i>in-kapp-i</i>	<i>in-dox-ni</i>
2	<i>id-der-i</i>	<i>ik-kapp-i</i>	<i>id-dox-ni</i>
3	<i>i-der-i</i>	<i>i-kapp-i</i>	<i>i-dox-ni</i>
pl. 1	<i>in-deder-inna</i>	<i>in-kakapp-inna</i>	<i>in-dox-ninna</i>
2	<i>id-deder-ittan</i>	<i>ik-kakapp-ittan</i>	<i>in-dox-nittan</i>
3	<i>i-deder-i</i>	<i>i-kakapp-i</i>	<i>in-dox-ni</i>

⁷ 女性名詞のマーカである語尾-*eta* と共通の語尾であろう。 *xattayteta* 「昔の時代 ‘old times’」のように名詞化したものもある。

⁸ インフォーマントによれば、すべての形容詞が(ii)、(iii)の形を備えているわけではないという。調査の過程でも、*haraya* 「新しい」、*keraya* 「古い」、*lekaya* 「多い」、*xattaya* 「昔の」などはもっぱら(ii)の形が確認された。[例] *kodateta lekaya* (又は *(a)kutta*) 「たくさんのお金」、*mehadda keraya* 「古い服(pl.)」、*apa xattaya* 「昔の習慣」

なお、(ii)(iii)では、本来の形容詞の語頭に現われる *a* が認められない。

⁹ 例えば、

akupnitto 「暑い、熱い」(動詞形は *kupeta*)

aqappanawnitto 「寒い」(動詞形は *qappannawetta*)

apulawnitto 「涼しい」(動詞形は *pulawetta*)

これらの形は-*nitto* という要素を含んでいるが、これは次例中の能動分詞(性・数により語尾変化する)に現われる要素と同一である可能性が高い。本来の形容詞形が別に期待される。

lappata 「歩く」

inna lappina 「歩いている赤ん坊(sg.m.)」

inannta lappinitto (sg. f.)

wohatta 「叫ぶ、吠える」

kuta wohanno 「吠えている犬」(sg.m.)

kutta wohanna (pl.m.)

この分詞語尾は、注3の動詞語尾-*natta* と合わせて再考、再確認の必要がある。

¹⁰ 語幹の範囲は仮に定めたものである。なお、ここでは、形容詞の非過去形のみを挙げたが、過去形も合わせて考察する必要がある。

形容詞の複数形の人称変化では、複数名詞を修飾する形容詞の場合と同様、語幹に重複形が現われるのが特徴である。

(11a) kuto-se pora ikutti. (sg.)

犬-その 黒い 大きい

「その黒い犬は大きい」

(11b) kutto-sene porpora ikukutti. (pl.)

なお、(ii)の doxeta「空腹である」は、名詞を修飾する形として本来の形容詞形を持たない¹¹。このタイプに属するものとして、depotta「空腹である」、paqeta「病気である」、kafatta「疲れている」などがある。

2 動詞

2-1 動詞の分類

これまでに収集した動詞を、語尾に着目して整理すると、次のようにまとめることが出来る¹²。

	a	b	c	d	e
食べる	dama (damiya)	dameta			
見る	akka/e (akiya)	akketa	akkissa		
言う	kida (kidiya)	kideta			
売る	kata (katiya)	kateta		katatta	
教える			kollissa		
買う	pididi (piddiya)	piddeta		piddatta	
分ける	rexa (rexiya)	rexeta			rexameta
造る	uma (umiya)	umeta			umameta

すなわち、a列は他の列の形と比べて、いわば裸の形である。b列は語末が-eta(このeはたいてい長音である)、c列は-ssa、d列は-tta、e列は-meta¹³である。

以下に、上表の形がそのまま用いられている用例をいくつか挙げる。

(12) afa Xonso kollattan hena.

ことば コンソ 学ぶ ～したい

「私はコンソ語を学びたい」

¹¹ この場合は、分詞などに類した派生形で補うものと推測される。

¹² a列中の括弧内の形(語末が-yaの形)は方言形(Fasha地域)と見なされるので、現在のインフォーマントの出身地域の形に統一するため、分析の対象からは除外することにする。

¹³ -metaは-m-と-etaに分けられる。-etaはb列に現われる語尾と同一である。

- (13) tika akimeta-opa anta¹⁴ anafani.
 病院へ 行く ねばならない
 「私は病院へいかねばならない」
- (14) qotan ke akke malla inxasonni. (qotan---malla 「---に関して」)
 あなた 会う 嬉しい
 「あなたに会えて嬉しい」
- (15) Kusse tika haraya pidmeta-malla okkatta kate.
 (人名) 家 新しい 買う-ために 家畜 売った
 「クッセは新しい家を買うために家畜を売った」
- (16) olqara orsatta payyen.
 一緒に 議論する 始めた
 「一緒に彼らは議論を始めた。」
- (17) mana iketa/dameta he'enta?
 何を 飲む/食べる ~したい
 「あなたは何が飲み/食べたい？」
- (18) shahetan ika hena.
 お茶 飲む ~したい
 「私はお茶がのみたい」
- (19) Kusse afa enklizeniya ino kollissa i'ettansha.
 (人名) ことば イギリスの 我々に 教える 出来る
 「クッセは英語を我々に教えることができる」

上表中の形がそのまま現われる環境は、英語などと同様の不定詞構文であることから、上記の形はすべて不定詞ないしは動詞的名詞に類するものと見なしてよいであろう¹⁵。

2-2 接辞の文法的意味

a 列のゼロ語尾形(および b 列の形から -eta を除いた形)を一種の語幹ないしは

¹⁴ anta は不規則形であるが、a 列に分類される。b 列では aneta となる。

¹⁵ インフォーマントは、語尾が -eta の b、e を不定詞とし、その他の a、c、d の形を動名詞とするが、これらの語尾によって品詞を区別するのは適当ではないだろう。なお、語末の -eta は多くの名詞の語尾に現われる。特に、hoteleta 「ホテル」、suqeta 「マーケット」、sporteta 「スポーツ」hisapeta 「算数」など外来語起源の名詞にしばしば現われる。

基本形と見なし、これに文法的な機能を担う形態素、-ssa、-tta、-m が接尾されているという視点から分類を試みると、以下に例示するように、-ssa および-tta は概ね動詞化や他動詞化、使役化を、-m は受動を表わすものと考えることができる。

2-2-1 ゼロ語尾(または-eta) :-ssa

akketa 「見る」	akkissa 「見せる」
dineta 「直る、治る」	dinissa 「直す、治す」
foleta 「沸く」	folissa 「沸かす」
lippeta 「消える」	lippissa 「消す」
pateta 「なくなる」	patissa 「なくす」
qepeta 「折れる」	qepissa 「折る」
titaweta 「戻る」	titassa 「戻す」

(20a) paqiyo iddine. (dineta)

私の病気 治った
「私の病気がなおった」

(20b) akimitta paq-iyo idinshe. (dinissa)

医者 病気-私の 治した
「医者が私の病気を治した」

(21a) satet-iyo ipatte. (pateta)

時計-私の なくなった
「私の時計がなくなった」

(21b) satet-iyo inppashshe. (patissa)

時計-私の なくした
「私は時計をなくした」

(22a) tamo-se iqeppe. (qepeta)

枝-その 折れた
「その枝は折れた」

(22b) Kusse tamo-se qepishe. (qepissa)

(人名) 枝-その 折った
「クッセはその枝を折った」

(23a) Pisha fola-ppa chan. (foleta)

水 沸く-~ている
「湯が沸いている」

(23b) Iskatteto-se pisha folisse. (folissa)

婦人—その 水 沸かした

「その婦人は湯を沸かした」

2-2-2 -tta: -ssa

dikkatta 「終わる」

qa'atta 「止まる」

ubnatta 「知る」

dikkissa 「終える」

qa'atissa 「止める」

ubnassa 「知らせる」

-tta および-ssa は、次のように形容詞を動詞化する。

akutta 「大きい」

akoke 「乾いた」

aqoiya 「湿った」

akokkoka 「高い」

anukkulla 「安い」

lekaya 「多い」

kuttatta 「大きくなる」

koketa 「乾く」

qoiyatta 「湿る」

kokkonnatta 「高くなる」

nukulatta 「安くなる」

lekatta 「多くなる」

kuttissa 「大きくする」

kokissa 「乾かす」

qoiyyissa 「湿らす」

kokkonnassa 「高くする」¹⁶

nukulassa 「安くする」

lekissa 「多くする」

次のように-tta が自動詞で、-eta(ゼロ語尾形)がその他動詞である例が若干認められる。

immakatta 「満ちる」

payyatta 「始まる」

immaketa 「満たす」

payyeta 「始める」

(24a) tamareta sateta settetiya payyatte/dikkatte. (payyatta/dikatta)

授業 時 8 始まった/終わった

「授業は8時に始まった/終わった」

(24b) kollisambayta tamareta sateta settetiya payye/dikkishe. (payyeta/dikkissa)

教師 授業 時 8 始めた/終えた

「教師は8時に授業を始めた/終えた」

(25a) makina areppaye qa'ade. (qa'atta)

車 ここに 止まった

「車がここに止まった」

¹⁶ 注6参照。

cf. (25b) isha makina areppa qa'atishe. (qa'atissa)

彼 車 ここに 止めた
「彼は車をここに止めた」

また、-tta : -ssa が反対の概念を表わす次例も参照されたい。

kollatta 「学ぶ」	kollissa 「教える」
leqesieta 「借りる」	leqessatta 「貸す」

更に検討の余地が残されているが、次例の-tta には再帰的な機能(中動態)が含まれていると考えられる。

(26a) Kusse okkata-di katatta-e urumala-pa ane. (katatta)

(人名) 雌牛-彼(自分)の 売る-ため 市場-へ 行った
「クッセは自分の牛を売りに市に行った」

(26b) Kusse xorma Parisha kateta-e urumala-pa ane. (kateta)

(人名) 雄牛 (人名) 売る-ため 市場-へ 行った
「クッセはパリシャの牛を売りに市に行った」

(27) folisitta -se-e diyai, alleta-ker dekado. (dekatta)

警官-その 来るだろう 家-中に 隠れろ
「警察が来るから、家に身を隠せ」

2-2-3 -m

-m は、次のような例から、明らかに受動を表わす接辞である。

hateta 「盗む」	hatameta 「盗まれる」
majeta 「壊す」	majameta 「壊れる」
paneta 「開ける」	panameta 「開く」
purissa 「変える」	pursameta 「変わる」

(28a) Kusse kerase-e xottoman tome. (tometa)

(人名) 泥棒 拳で 殴った
「クッセは泥棒を拳でなぐった」

(28b) kera-se xottoma Kusse-nne tomame.

泥棒-その 拳で (人名)-によって 殴られた
「その泥棒 拳で クッセによって 殴られた」

- (29a) Kusse qoyra kutta jampetan mure. (mureta)
 (人名) 木 大きい 斧で 切った
 「クッセは 大きい木を斧で切った」
- (29b) Qoyra-se kutta Kusse-nne jampetan murame.
 木-その 大きな (人名)-によって 斧で 切られた
 「その大きな木はクッセによって切られた」
- (30a) Kusse okta-e maje. (majeta)
 (人名) 壺 壊した
 「クッセは壺を壊した」
- (30b) Okta-se Kusse-nne majamte.
 壺-その (人名)-によって 壊された
 「その壺はクッセに壊された」
- (31a) kahayta-se ipute. (puteta)
 ゲーム-その 勝った
 「彼はそのゲームに勝った」
- (31b) kahayta-se-oppa iputame.
 ゲーム-その-において 勝たれた
 「彼はそのゲームで負けた」
- (32a) appo-se pita piso-ppae upnatame. (upnameta=upnatta の受動)
 人-その 国 すべての-に 知られている。
 「その人は国中に知られている」
- cf.(32b) Kusse otata-se-e orra upnayshe. (upnassa)
 (人名) ニュース-その 人々 知らせた
 「クッセはそのニュースを人々に知らせた」

3 おわりに

本稿では、これまでの調査データを整理し、形容詞の形態、統語上の側面、動詞の接辞機能等について明らかになった点を簡単に報告した。収集したデータが質、量ともに限られているため、細部についてはまだ多くの疑問が残されている。特に動詞については、時制、活用の詳細など、重要な部分が未分析のままである。より包括的な記述に向けての今後の課題である。

【参考文献】

- Daudey, Henriëtte & Anne-Christie Hellenthal (2004) *Some morpho-syntactic aspects of the Konso language* (Leiden University, Ph.D. Thesis)
- Getahun Amare (1999) 'Noun Phrase Structure in Konso'. *JES* Vol.32/1.
- Wedikind, Klaus ed. (2002) 'Sociolinguistic Survey Report of the Languages of the Gawwada (Dullay), Diraasha (Gidole), Muusiye (Bussa) Area'. SIL International.
- 小脇光男(2006)「コンソ語文法記述のための基礎データ」乾秀行(編)『オモ・クシ系少数言語の調査研究および地理情報システムを用いたデータベース構築 (Cushitic-Omotc Studies 2006)』61-79, 山口大学
- 小脇光男(2007)「コンソ語の基礎語彙—文字化への試み—」乾秀行(編)『オモ・クシ系少数言語の調査研究および地理情報システムを用いたデータベース構築 (Cushitic-Omotc Studies 2007)』93-139, 山口大学